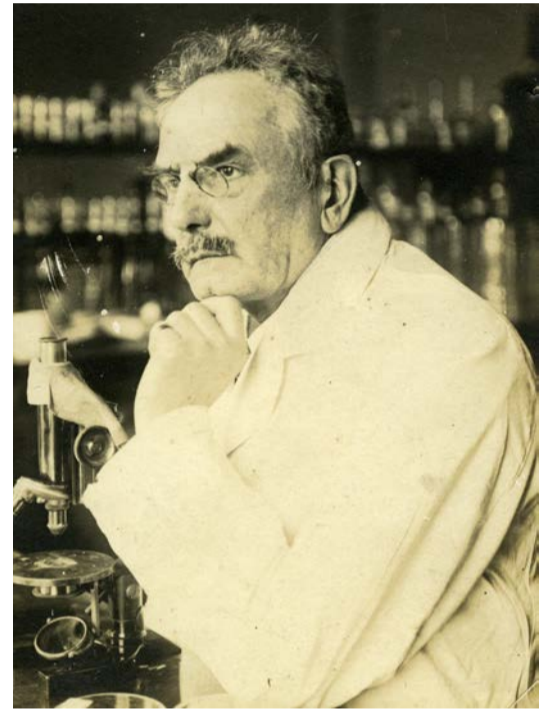


世界レベルの研究者招聘

ーハンス・モーリッシュ関係史料ー

ハンス・モーリッシュ（Hans Molisch 1856～1937）は、オーストリアの植物生理学者です。ウィーン大学で学び、同大学の教授になりますが、第一次世界大戦後の極度に疲弊した国内での苦労を経て、大正12年（1923）に東北帝国大学に招かれ（65歳）、できたばかりの理学部生物学科の第六講座を担当しました。大正14年（1925）に離任し帰国した後は、日本滞在経験をもとに、研究書や日本文化の紹介書を残し、ウィーン大学総長も務めた後、81歳で逝去しました。



モーリッシュの仙台滞在は2年半に過ぎませんが、人々に強い印象を残したようです。史料館が保管する140点の史料は、相馬寛吉名誉教授（1926～95）が取りまとめた寄贈史料（1982年）と、追加の寄贈史料から成りますが、主な旧蔵者は、仙台時代のモーリッシュの助手をつとめ後に新潟大学教授となった相馬悌介（1904～1999）、評伝を著し後に淑徳大学教授となった渋谷章（1948～）、などの方々です。モーリッシュ自身が残した史料に加え、周囲の方々の収集した史料が少なくないことは、彼に対する人々の敬愛の情を感じさせます。

東北帝国大学の理学部生物学教室は、昭和3年以降も数年間、世界の著名な生物学者を招きましたが、その後この伝統は絶えてしまったといえます。国際化やグローバル基準が叫ばれる昨今ですが、ひとときモーリッシュと過去の伝統を思い返してみてもいいかがでしょうか？